駒沢大学地理学科の生い立ち

多　田　文　男

目　　次

はしがき
Ⅰ　専門部地理歴史科前期　設立時代（昭和４—16年）
1.　専門部（高等師範科）地理歴史科の由来
2.　駒沢大学専門部地理歴史科の設立
3.　当時の教員
4.　学生定員
5.　中等教員無試験検定
6.　地歴科の学風
Ⅱ　専門部地理歴史科時代後期　大戦—終戦時代（昭和16—23年）
1.　大戦時代　i）概況　ii）授業状況　iii）修業年限の短縮・卒業期繰上げ　iv）学徒出陣及び学生募集休止
2.　専任教員陣の潰滅
3.　終戦時代　復興第一期内田時代
4.　復興期　井上・井関時代
Ⅲ　新制大学文学部地理歴史学科地理学専攻時代（昭和24—40年）
1.　終戦直後の教育改革，新制大学への転換
2.　地理学専攻課程と歴史学専攻課程の分離
3.　新制大学地理歴史学科地理専攻発足当時の開講科目とその単位
4.　学科目履習・卒業の方法
5.　教員組織
6.　専門部地理歴史科卒業生の新制大学への入学
7.　新制大学卒業生の他大学大学院への進学
Ⅳ　新制大学地理学科時代後期—大学院併置時代—（昭和41—52年）
1.　大学院地理学専攻設置
2.　大学院教員・学生
3.　学部地理歴史学科の地理学科・歴史学科の正式分離
4.　論文博士の誕生
5.　教員の移動
6.　地理学科と自然科学教室
7.　学部卒業論文と修士論文
8.　応用地理研究所設置
9.　岩見沢教養部で地理学科の授業開始
10.　海外研修
11.　学園紛争と駒沢地理学会解散
12.　測量士補資格の無試験検定
13.　課外ゼミ活動

V　駒沢大学地理学関係出版物

1.　駒沢地歴学会誌
2.　駒沢大学学報
3.　駒沢大学研究紀要
4.　文学部研究紀要
5.　駒沢地理１―３号
6.　駒沢地理４号以降
7.　デ　ル　タ
8.　地理学研究ノート
9.　大学院地理学研究
10.　蛇　行
11.　出発　a　切峯面　b　世田谷

は　し　が　き

駒沢大学地理学科の前身は昭和４年４月に設置された専門部（高等師範部）地理歴史科である。昭和54年３月に満50年の年月を閲みする事になる。此間，地理歴史科は地理，歴史２学科に分離し，教員，履修科目等が著しく変化して来ている。その歴史をまとめて置くのも無意味なことではない。

私は昭和14年４月駒沢大学の兼任講師に任ぜられて以来，昭和53年３月退職するまで39ケ年の歳月をここで過ごした事となる。この期間に見聞したことを中心に地理学科の生い立ちを執筆して見た。併し内容は駒沢大学八十年史等文献による所もあるが，記憶によるところが多いので誤りや脱落の多いことと思う。敢えてこれをここに発表するのは，これを叩き台として正確な50年史の編まれることを期待するからである。

地理学科49年を便宜上分けて

Ⅰ　専門部地理歴史科時代前期　設立時代（昭和４年―16年）

Ⅱ　専門部地理歴史科時代後期　大戦―終戦時代（昭和16―23年）

Ⅲ　新制大学文学部地理歴史学科地理学時代（昭和24年―40年）

Ⅳ　新制大学文学部地理学科時代（昭和41年―52年）（大学院地理学専攻付置時代）

の４項に分けて記載することにした。更にⅤとして地理学関係の研究を載せてある出版物の性質を略記して置いた。

この報告をつくるに際し，地理学科の教員の方々，教務部の新井孝春・貫江博之氏，人事部の花岡部長並びに多くの卒業生の方々の御意見を煩わせたところが多い。これらのかたがたに感謝の意を表する。

Ⅰ　専門部地理歴史科時代前期―設立時代（昭和４―16年）

1.　専門部（高等師範科）地理歴史科の由来

これに就いては浜田真名二氏※の記事があるのでそれを紹介する。

中等教員（旧制中学校教員，現在の高等学校・中学校の教員）を養成するために，文部省がその

※浜田真名二　地歴科の生立ち　駒沢地歴学会誌３号　昭和15年（1940）10月

直轄の東京師範学校（後の東京高等師範学校）に中学師範学科を創設したのは明治８年のことである。修学年限は最初２ケ年，間もなく３ケ年半となり，後には４ケ年に延長せられ，教科目は凡ての学科に亘り，教科書は歴史科では皇朝史略，左伝，史記，通鑑擥要，西史綱紀，テーラー万国史，ギゾー文明史等が使用され，地理科ではモーリー地文学，デーナ地質学等が採用されていたという。

明治19年に東京師範学校は高等師範学校と改称され，専ら中等教員を養成する学校となり，在学生の学力を一層深くするために分科制度を採択し，文学科，理化学科，博物学科の三分科とし，その１を履修せしめた。地理科と歴史科とは文学科中に加えられ，修業年限４ケ年の間に，１年に６時間，２年に５時間を毎週この地歴科に配当するに止まっていた。

日清戦争後，中等教育の機関が増加して教員の養成が要求されるようになって，明治29年高等師範学校の三宅米吉教授は修業年限３ケ年の地理歴史専修科を設けることを唱道して容れられた。ついで明治31年には教育事業の進歩に鑑み，中等教員の学識が精深であることを求め，高等師範学校本科の文学部を４部に分割し，その１部を地理歴史部とした。これで同校地理歴史並行専攻の体制が整った。以後他の学校の地理歴史科でも範をこれらに求めたのであった。

第１表　駒沢大学地理歴史科創立当時の学科目

学科＼学年	第１学年	毎週時数	第２学年	毎週時数	第３学年	毎週時数
倫理学	国民道徳	1	倫理学概論	2	東洋倫理	2
禅学概論	禅学概論	1	同上	1	同上	1
歴史	国史概説 東洋史概説 西洋史概説	9	国史学 東洋史学 西洋史学 有職故実風俗	10	国史学 東洋史学 西洋史学 史学概論	10
地理	自然地理通論及実習 人文地理議論 日本地誌 外国地誌	6 2 2 2	自然地理通論 人文地理通論及実費習 日本地誌 外国地誌	2 4 1 2	自然地理通論 人文地理通論 日本地誌 外国地誌 地理教授法	3 2 1 2 1
地質学 気象学	地質学	2	地質学 気象学	1 2		
哲学・教育	心理及論理	3	哲学概論 教育学	2 2	教育史及教授法	2
東洋哲学					仏教概論	
法政・経済 社会学	法学通論	2	経済学	2	社会学	2
国語及漢文	国語	2	漢文	2		
英語	英語	3	英語	3	英語	3
体操	教練及体操	9	同左		同左	2
合計		37		38		38

科外　実地踏査・視察見学　便宜の時を利用して時間外に指導す

国運の発達につれて，私立大学にも高等師範科を置くものが出来て来て，早稲田大学では，明治36年に，修養年限３ケ年の昼間授業の地理歴史科が設けられ，これは明治43年まで継続した。

また日本大学や立正大学等の私立大学では昼間小学校その他で働いている者の，学力向上のため，大正の末年から地理歴史の高等師範科を夜間授業として，開講するものが出来た。

駒沢大学では昭和４年高等師範科の拡充を企て，昼間教授の地歴科を専門部に設立したのであった。

2. 駒沢大学専門部地理歴史科の設立

大正14年３月，文部省から純然たる大学としての設置が認可された「駒沢大学」の組織は，仏教学科・東洋学科・人文学科の３科目の学部の外，予科を併置すると共に，一方禅学・仏教学・国語・漢文を専攻する専門部を大正14年８月に設置した。専門部は高等学校（旧制）や大学予科と同等のものである。

昭和３年専門部卒業生に対し，漢文科の中等教員無試験検定の資格が与えられることになった。

昭和４年４月，大学は専門部の仏教学専攻を仏教科とし，国語漢文専攻を国語漢文科とし，更に歴史地理科及び専修科を新たに設けることになった。この新学科の卒業生は中等学校の歴史地理教員無試験検定の資格が与えられる事になった。

専修科は歴史地理科を卒業し更にその学科に就いて研究しようとするものを１ケ年間入学させるもので，その学科目は右表の如くであった。

創設当時の学科目は前頁の第１表の如くであった

学科目	講義題目	毎週時数
倫理・教育	倫理研究 教育研究	2
歴史	国史研究	4
	東洋史研究	3
	西洋史研究	3
	教授法研究	1
地理	地理学研究	6
	地理学通論	2
	地理学演習	2
	教授法研究	1
合計		24

3. 当時の教員

地理歴史初期の教員とその担当科目は次の表の如くであった。

地理関係

脇水鉄五郎　地質学・地形学

綿貫　勇彦　日本地誌・集落地理学　地理学方法論・経済地理・地理実習

北田　宏蔵　地図学・計測法・気候学・世界地誌（主にアメリカ）

浜田真名二　政治地理学・地理教授法・地理実習

兼任　浅野彦太郎　海洋学

〃　羽原　又吉　水産経済学

歴史関係

圭室　諦成　国　史

小林　　元　西洋史

大久保幸次　東洋史（特にイスラム文化）

兼任　岩井　大慧　東洋史
〃　佐藤　堅司　西洋史・歴史教授法
　　中山久四郎　東洋史

地理科教員に就いて云えば，脇水鉄五郎博士は慶応３年生れ，明治26年東大地質学科を卒業して後直ちに東大に奉職し，昭和３年まで永く地質学・土壌学を教授していたその道の泰斗。綿貫勇彦氏は松山高等商業学校教授兼松山（旧制）高等学校教授。北田宏蔵氏は東大地理学科卒業後長野師範教諭を経て鎌倉師範教諭であり，浜田真名二氏の履歴は審らかでないが東京高等師範学校の卒業生であったと伝えられている。何れも駒沢大学の地理学科創設に際して招聘された人々であった。

浅野彦太郎講師は水産試験場の生物学者であったが昭和13年10月逝去され，その後任として三野与吉講師が兼任として来任，昭和12年には東洋史の松田寿男氏が来任，昭和14年には筆者が兼任として来任，地形学を担当するようになった。地理科には助手又は副手１人が居り，研究室の整備・学生の実習指導に当って居た。昭和12年頃は北村清氏，その後武島鋏二氏，川上裕之氏等が在籍していた。

4.　学生定員

地理歴史科の学生定員は毎年度50人としてあったが，卒業生名簿によって卒業生数を計算すると，

昭和６年度（第１回）14人　昭和７年度10人　昭和８年度６人　昭和９年度14人　昭和10年度20人　昭和11年度32人　昭和12年度34人　昭和13年度37人　昭和14年度37人　昭和15年度33人　昭和16年度34人　昭和17年度48人　昭和18年度39人　　昭和19年度46人　昭和20年度33人　昭和21年度地理専攻20人　歴史専攻20人　昭和22年度地理40人　歴史19人　昭和23年度地理18人　歴史11人　昭和24年度地理10人　歴史15人　昭和25年度地理12人　歴史10人

となっている。始めは数人乃至20人で僅かであったが地歴科教員無試験検定資格が得られるようになってから定員に近づいて来た。昭和19年度からは入学生を地理学専攻・歴史学専攻に分けてとる事となった。戦況が激しくなって昭和20年度，21年度は学生募集がなかった。それでも23年度24年度に卒業生のあるのは応召した学生が帰学して学を続けた為であろう。専門部地理歴史科は，昭和25年度の卒業生を出して26年３月で廃止となった。

昭和24年からは新制大学として４年制の地歴学科学生を募集したが，26年６月の名簿によれば，新制大学地理専攻４年生７人，３年生５人，２年生２人，１年生12人，歴史専攻４年生３人，３年生９人，２年生５人と少なくなった。女子学生は昭和21年度から入学させるようになったが，地歴学科では極めて少く毎年度１―２名を数える位であった。昭和37年頃，全学併せて50人位，はじめて専用のトイレが作られる状態であった。現在は１クラス10数名居り，成績優秀で近年は管長賞がその手に収められるのが普通となった。

5.　中等教員無試験検定

由来文部省は私学の高等師範科の卒業生に中等教員の無試験検定を受ける資格を与う可きか否かを決定するために設置後凡そ３ケ年を経た頃，学内の教授施設を点検すると共に最上級に在学する

ものの学力を考査する事にしていた。それで第１回卒業生は特に熱心に勉学した。その試験は昭和６年12月から７年１月にかけて行われた。学内では一度に地理と歴史の資格を得ることは困難であろうと取沙汰していたが，５月９日試験の結果が発表され，第１回以後の卒業生に地理・歴史両科目の無試験検定がおりることとなった。地歴科卒業の後，中等教員の資格が得られない場合は修業年限１ケ年の専修科が設けられていたが，その修了者にも無試験で資格が与えられるように，昭和10年になった。

6. 地歴科の学風

昭和７年１号館・２号館が完成したので，地理歴史科はその南東翼に５室を与えられ，研究室・実習室・講義室において落ついて研学する事になった。

教科の年中行事としては１・２・３年１回づつの日帰り巡検と１―２泊の巡検が行われ，３年のとき地理と歴史の卒業論文を書き，論文を書かない学生は地図の作業でその代りとした。

地歴科設立後間もなく教員を顧問として学生・卒業生が一丸となって駒沢大学地歴学会が設立され，講演会・巡検・懇親会を催して来たが，昭和13年３月から年刊誌駒沢地歴学会誌を発行し，論説，彙報を掲載することになった。この雑誌は15年10月の第３号まで継続刊行されたが，戦争が激しくなるに及んでやんだ。

脇水教授は天然名勝記念物保護委員会委員も兼ねていたので，天然記念物として指定して慾しい人から先生に贈られる鉱物・岩石が多く，先生はそれを標本として教室に展示された。戦後の学園紛争によって一部散逸したものもあり，レッテルの失われたものも多かったが，現在自然科学教室に展示されているものがそれであり，立派なものが多いが，就中マンモスの臼歯（レッテルがはがれて産地不明）は貴重な標本である。

北田教授は数理地理学を得意とした人で，ウェゲナーの大陸漂移説が地質学者の間に反対論の多かった時代からこれに賛同し，その和訳を公刊した。駒沢大学時代は地図投影法の研究に没頭し，数多の新しい便宜的投影法を案出し，遂に「従来の投影法を検討して創案の諸図法に及ぶ」という論文をまとめて東大から理学博士の学位を得た。

綿貫教授は松山在住時代，瀬戸内海地方を旅行してその観察記を「瀬戸内百図誌」としてまとめ，「地理方法論」を刊行してその方法論を世に問い，次いで実証研究の例として聚落地理の研究を学生と共に行ない，これを「集落地理学」として刊行した。綿貫教授は一日中研究室に在って学生の指導に当っていたので，歴史の圭室教授と共に学生の信望絶大であり，学生との共同研究の成果もあがった。

当時東京で支配的に盛んであった人文地理学の方向は４つあった。その１は自然環境的地誌を目指す方向でその代表者は東京文理大の田中啓爾教授であった。その２は景観論乃至文化景観形態学の１群で東大の辻村太郎教授がその指導者であり，その３は所謂地人相関の理論で，東京文理大の内田寛一教授が指導者であった。その４が歴史地理学的把握の研究グループで，綿貫教授は歴史地理学の研究が必要なことを主張した。歴史地理学が歴史学の部門なのであるか，それとも地理学に属するものであるかに就いて，綿貫教授は駒沢地歴学会誌創刊号（昭和13年）で次のように述べて

いる。「史学も人文地理学も共に人間生活の発展の歴史を研究する学である。史学は人文それ自身の本質を明かにせんことを目的として，それに応ずる方法を選んでおり，人文地理学は地域の特性を明かにせんために人文の理解につとめ，その目的に応ずる方法を選んで来ている。一例をとり上げる。武蔵野という特有な台地があり，そこに特有な新田村が特有な生活をなしつつあるという一事実がある。この村がどんな社会的事情によって発生し，またどんな発展をなしたかという過程を通じて研究され，その村の生活が理解されたとすれば，それは明かに史学の方法による研究である。人文地理学でこの新田村を研究するときには，その村の歴史が武蔵野という特有な土地と結合しているという過程を通じて村の生活を研究し，それによって武蔵野という特有な地域の人文的構造を理解することを目的とする。即ち同じく歴史が研究されているのであるが，史学は生活それ自身の構造を（時代的変化を）人文地理学は地域の構造（特性）としての生活をそれぞれ理解することを目的とする。」と説いている。

地理歴史科第１回（昭和６年度）卒業生赤峯倫介氏は，卒業後も足繁く研究室を訪れ，綿貫教授を援けて学生の指導相談に与かると共に，外では歴史学研究会において活躍し，昭和12年には歴史学研究７巻11号を歴史地理学特集号として責任編輯し，「歴史地理学序説」と「最近における地理学並びに歴史地理学的成果」という論説を執筆し，当時の観念論的地理学方法論を批判し，地理学の進む可き方向を示し，その論旨は当時としては画期的なものであった。氏が綿貫教授の考えとして紹介している所では「土地と社会とは社会の労働過程における生産力によって直接に結合させられるのであり，ある拡がりをもつ一定の自然構造の土地即ち地方はそれが労働を対象とされることによって，その規定する範囲内に社会生活発展の契機が規定されるのである。即ち土地は作用し反作用される環境ではなく生活対象としての内容である。」と，生産過程を重んじたように書いてある。

地理歴史科第３回（昭和８年度）卒業生，深谷正秋氏もまた卒業後も学生・卒業生の間で指導力をもったが，氏は綿貫教授と共に実証研究の一例として条里制を取上げた。氏は条里制を大化改新以降班田制に伴なって行われた土地計画と解し，地理的立場において貢租の対象としての条里区画がいかなる労働を通じて，どのような地理条件の地域にどの範囲に施行されたかを封建的残存形態としての条里区域の考察から解明した。

かくて昭和12年満州事変勃発までの９年間はその後半の時期にいたって５・15事件や２・26事件があり，国内の攪乱や緊張が行われたけれども先ず穏和で学問に専念することの出来た時代であった。駒沢大学地理学科も良師の指導の下に一つの黄金時代を作りだし，他からも「駒沢派地理」と呼ばれる独特の評価を得ていた。

専門部地理歴史科の卒業生の中には桜井正信氏のように更に旧制学部の人文学科に進んで学の成就を志したものの少なくなかったし，大和英成氏のように法政大学旧制学部地理学科に進学した者もあった。

また卒業生の中には昭和11年卒の池田正友氏のように戦争中は拓殖協会にあって南方の地理的研究に従い，戦後は地理調査所地理委員会にあって日本地誌の研究に当り，在学生，卒業生有志の研究に便宜を提供した人もあった。昭和12年卒業の中田善水氏のように善隣協会にあって蒙古の第一

線で活躍した人もあった。

Ⅱ　専門部地理歴史科時代後期　大戦―終戦時代（昭和16―23年）

1.　**大戦時代**　満州事変の勃発―支那事変―太平洋戦争へとつながる時代即ち専門部地理歴史科時代の後半は暗黒時代であり，殊に昭和18―23年の戦争末期から終戦直後に至る間は殆んど学問の壊滅状態であったという。その状況を駒沢大学80年史から抜すいして述べよう。

i）概　況

授業科目はそのままながら時局講演会などで置換えられ，実質授業時間は減少し，次記のような項目が実施された。

a）靖国神社遙拝命令　　b）日本文化講義　　c）命令による軍講演　　d）御真影の奉安

e）国民精神総動員実施　　f）勤労作業

勤労作業は昭和13年６月９日付文部次官通達で始まった。始めは休暇を利用しての３―５日間という短期間であった。駒沢大学では昭和16年９月10日―16日の１週間，陸軍衛生材料廠へ勤労作業にいった。昭和17年７月８日―12日には立川獣医資材本廠へ行って作業した。教練服に戦闘帽をかぶり，巻脚絆をして雑嚢や水筒を備えていった。その中，勤労作業は勤労奉仕となり，全授業を放棄して行った。

g）興亜勤労奉仕隊　昭和14年６月の通達により全国の大学から指導教員278人学生1,640人を北支満蒙に派遣し，現地訓練を行うというもので，駒沢大学全体から20人の学生が教員と共に赴いた。

h）青年学徒に贈りたる勅語　i）ネオンの消灯　j）学友会を改組して報国団を結成　k）宣戦布告の昭勅

ii）授業状況

学生が勤労奉仕で居なくなったので教員が工場に出向き昼の休みを利用して最小必要な講義をした。

iii）修業年限の短縮，卒業期繰上げ

a）昭和16年度卒業生はその修業年限を３ケ月短縮し昭和16年12月に卒業した。

b）昭和17年は夏休みを１―３週間の範囲で行った。駒沢大学では休みを身心鍛錬期間と改称した。

c）昭和17年は地理歴史科学生を９月４日卒業させ，９月23日卒業式を行った。

d）昭和17年度入学生募集は９月にし，10月１日入学式を行った。

iv）学徒出陣及び学生募集休止

a）学生は昭和18年12月臨時徴兵検査を受けて俄かに同年12月陸・海軍に入隊した。

b）在学生徴兵延期の停止

c）昭和20年度には授業１ケ年停止の閣議決定があったが，同年終戦があり９月からは第２学期

が開始された。

d）昭和20年度，21年度は学生募集がなかった。併し除隊により，帰学したものが就学した。

2. 専任教員陣の潰滅

地理歴史科創設の際在職された教員の中で浅野彦太郎氏が逝去され，これに代って三野与吉氏と筆者が補充された事は前述したが，後期に入って地理学関係では専任教員の総てを失った。

昭和16年９月宇井伯寿師が学長となるや林屋亀次郎氏が学長参与となって林屋旋風と俗称される大学改革計画を実行せんとしたという※。この計画は駒沢大学は私立大学であっても，大学令による国家の大学であるから，宗門色を払拭して須らく官立大学の学風に従う可きである。とするにあったと云われる。この計画は賛成者少数で失敗して，林屋氏は宇井学長と共に就任５ケ月にして退職した。この際歴史科の圭室諦成教授は退任された。

地理学関係の教員には大学要路にある人がなかったため，この騒動の渦中には居なかったが，たまたまその頃，浜田真名二教授が退任された。教授は学科創立の時から永い間，学科の発達に尽された功が多かった人であり，学生の信望も厚かったという。教授は退任後いくばくもなく逝去されたという。

昭和17年８月14日耆宿であった脇水教授が逝去された。次いで研究室の中心であった綿貫教授もこの頃から健康を害して休講勝ちとなり，昭和18年６月23日遂に逝去された。また北田教授は大戦中，飯本信之氏と共に地図学研究所を創立されたが，昭和20年日本地図会社創立と共に，これに移籍されて研究と経営とに当る事となり，駒沢大学を退いた。ここで地理歴史科創設以来の地理学関係専任教員全部が潰滅した事となる。

3. 終戦時代　復興第一期　内田時代

昭和18年山上曹源師が総長の職につかれるに及んで脇水教授の後任として東京文理大学教授内田寛一氏を招聘し，兼任ながら地理科の主任とし人事等枢要な議に与からしめた。また脇水教授担当の地質学の講義を東京文理大の河田喜代助教授に非常勤講師として担当せしめることとなった。

これより先に，綿貫教授休講中，その代講をするため渡辺光，中野弘氏が兼任講師となり，綿貫教授逝去後も終戦にいたるまで講義を続けた。

終戦後，昭和20年９月，授業が再開した時になって専任教員はなく，兼任講師として内田寛一（主任），多田文男，三野与吉並びに新たに招聘した岩田孝三（現国士館大教授），辻本芳郎（現東京学芸大教授），浅香幸雄（現東京文理大名誉教授），河田喜代助・山鹿誠二（現東京学芸大教授）・小堀巌（現東大助教授），小栗宏（現東京学芸大教授），関口武（現筑波大助教授），青野寿郎（現東京教育大名誉教授），井上春雄（現信州大名誉教授），浅井得一（現玉川大教授）の諸講師が講義していた。また松尾俊郎（前駒沢大教授）・野口保市郎（前法政大教授）講師の名が昭和23，24年度の授業担当者の中に見える。内田寛一氏は昭和22年の中頃急に退任されて地理学科は中心をなくしたのであった。専任教員の居ない地理科では研究成果の挙がりようもなかった。

※駒沢大学80年史 駒沢大学 昭和37年

4. 復興期　井上・井関時代

昭和23年４月，井関弘太郎氏が駒沢大学専任講師として来任し，翌24年には助教授となって学科の中心となって，井上修次教授（現北大名誉教授）を専任として招聘，入江敏夫氏（現東京経済大教授），谷津栄寿氏（現筑波大教授）を専任助教授に，赤峯先輩を兼任講師に迎えるなど新制大学としての地理学科整備の任に就いた。

井関助教授は昭和19年９月地理歴史科の卒業生であり，京都大学地理学科３年間の修業を終えて母校に帰られたわけである。駒沢大学学生時代は陸水学の泰斗吉村信吉博士に就いて武蔵野台地の地下水の調査をされていたが，駒沢大学に来任されてからは登呂遺跡，銚子粟島遺跡，爪郷遺跡の発掘に参加して，沖積平野の生成過程を調べて地理学・考古学・第四紀学に貢献したのであった。常に教室にあって学生の指導に当ったので，地理学科は綿貫時代の黄金時代を復活したのであった。

Ⅲ　新制大学文学部地理歴史学科地理学専攻時代（昭和24―40年）

1. 終戦直後の教育改革，新学制への転換

終戦後，新たに教育基本法と学校教育法とが公布された。その主体は６，３，３制または新学制といわれるものである。これまでは小学校６年，中学校５年，高等学校３年，大学３年の制度であったが，小学校６年，中学校３年，高等学校３年，大学４年の制度に改められた。

駒沢大学では昭和24年度から新制大学制に切替えることとなり，旧制の学部と専門部との学生は希望者に限り，臨時の移行措置として新制学部の学生に移行せしめ，希望しない者はそのまま，旧制学部，専門部を延長して卒業せしめるようはからった。かくて旧制専門部地理歴史科地理学専攻は26年３月まで存在してついに廃止された。日本の地理教育界に名実共に評価の高かった綿貫教授の影響の残っていた地理科はここに終った。

2. 地理学専攻課程と歴史学専攻課程の分離

専門部地理歴史科では昭和19年度入学生から地理学専攻，歴史学専攻に分けて学生をとり，両専攻の運営，教員間の交流も次第に別々になっていったが，新制大学になると両専攻の関係がいよいよ縁遠いものとなり，独立学科と大して変わらないものとなった。

3. 新制大学地理歴史学科地理学専攻発足当時の開講科目とその単位

1. 必修科目（20）

地理学研究法及地理学史（４）　自然地理学演習（４）　人文地理学演習（２）
自然地理学実習（２）　人文地理学実習（２）　野外巡検（４）

2. 選択科目（44）

人文地理学概説（４）　自然地理学概説（４）　地図学概説（４）　日本地誌Ⅰ（４）
日本地誌Ⅱ（４）　外国地誌Ⅰ（４）　外国地誌Ⅱ（４）　経済地理学Ⅰ（４）
経済地理学Ⅱ（４）　人口地理学及人類学（４）　歴史地理学（４）　集落地理学（４）

第2表　駒沢大学専門部地理歴史科地理教員名

昭和4年～昭和23年

昭和4～11年	昭和12年	昭和13年	昭和14～16年	昭和17年	昭和18年	昭和19年	昭和20年 終戦後	昭和21年	昭和22年	昭和23年
脇水鉄五郎	脇水	脇水	脇水	脇水（8月逝去）						
綿貫勇彦	綿貫	綿貫	綿貫	綿貫	綿貫（6月逝去）					
北田宏蔵	北田	北田	北田	北田	北田	北田				
浜田真名次	浜田	浜田	浜田	浜田（退職）						
此間 浅野彦太郎	浅野×三野与吉（逝去）	三野	三野	三野	三野	三野	三野	三野	三野	三野
此間 羽原又一			多田文男	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田
					内田寛一	内田	内田	内田	内田（退職）	
				渡辺光	渡辺	渡辺	渡辺			
				中野弘	中野	中野	中野			
							岩田			
							浅香	浅香	浅香	浅香
							辻本芳郎	辻本	辻本	辻本
							河田喜代助	河田	河田	河田
									小栗宏	小栗
									井上春雄	井上
									青野寿郎	
									小堀巖	小堀巖
									浅井得一	
										入江敏夫
										関口武
										谷津栄寿
										山鹿誠次
										井関弘太郎
										松尾俊郎

第3表　地理学担当専門科目と担当者（昭和22年～39年）

	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
自然地理学概論			関口(他資料で付記)	谷津	谷津			
自然地理学概説			谷津			谷津	谷津(井口)	井口
自然地理各説						谷津	今朝潤	谷津(陸水)、関口
自然地理学実習								
自然地理学演習								
人文地理学概説			井上	井上		井上	入江	入江
人文地理学概論					小栗(他資料で付記)			
人文地理各説				入江		入江	井上・大和・山鹿	井上・大和
人文地理学各説			野口・松尾					
人文地理誌		小堀						
人文地理		井上・松尾	小堀					
人文地理学実習								
人文地理学演習								
地誌学概説			井上	井関		井上		入江
地誌		井上(修)						
日本地誌	青野・小堀	井関・小堀	小堀		入江・関口	入井	井上	井口
日本地誌 I								
日本地誌 II								
外国地誌			山鹿	井上・山鹿	井上・関口	井上	井上・入江	井上
欧米地誌	青野・辻本	井上修・辻本・山鹿	小栗・山鹿	山鹿				
アジア地誌	浅井・小栗・多田	井関・小栗・多田	小栗					
外国地誌 I								
外国地誌 II								
気候	井上(春)							
気候学		関口	関口	関口		関口	関口	関口
地形	多田	多田						
地形学			谷津		谷津			
地図学概説			入江			谷津		井口
地図学実習			井関		今朝洞			今朝洞
地図研究(実習)	多田	多田	谷津	谷津				
地図学演習						桜井・今朝洞		
経済地理学						他資料に記載なし		
経済地理学 I								
経済地理学 II								
経済地理					井上・入江			
交通地理			赤峰					
交通	浅井	小堀						
歴史地理学								
歴史地理					大和			
郷土地理学								
人口地理学・人類学								
人類学						小栗		小栗
人口集落地理学				井関				
民族学						小栗		小栗
民族民俗	辻本	辻本	野口					
集落地理学								
海洋天文学					鈴木			
天文学							関口	
海洋学及陸水学								
地球海洋	三野	谷津						
地球物理学							谷津	
地質	河田							
地質学		河田	河田		河田		谷津	
地質学及土壌学								
資源産業	辻本	辻本						
地理通論	浅香	山山	鹿					
地理思想発達史	小堀	小堀						
地理学研究法及地理学史								
地理学実習			関口		谷津・河田	関口		
地理実習	小栗・河田	井関・小栗・小堀・河田	赤峰・井関					谷津
地理学演習			入江	入江	井上	谷津・今朝潤・大和・小川	谷津	
地理演習	浅井・浅香・小栗	井関・谷津	谷津	谷津				
地理統計学								
地理教育			井関					
地理教授法	三野	関口		井関				
天文地理			鈴木(健)					

（教員は他に一般教育科目、２部、短大学の地理地学関係をも担当す）

30 年 度	31 年 度	32 年 度	33 年 度	34 年 度	35 年 度	36 年 度	37 年 度	38 年 度	39 年 度
谷 津 関 口	谷 津	谷 津	谷 津	前)谷津 後)井口	井 口	井 口	井 口	井 口	多 田
	井 口	井 口	井 口	井 口	渡辺(一) 井口先生代講	井 口	井 口	井 口	小 池
	井 口	井 口	井 口	井 口	井 口	井 口	井 口	井 口	小 池
入 江	入 江	入 江	入 江	入 江	斎 藤	渡 辺	渡 辺	渡 辺	大 和
大和・前)小川 後)渡辺									
	入 江	入 江	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和
	入 江	入 江	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和
入 江									
井口・大和									
	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	小 栗	大 和	小 栗
	関 口	井 口	井 口	井 口	小 栗	小 栗	大 和	大 和	渡 辺
多 田									
	井 口	関 口	関 口	関 口	関 口	渡 辺	大 和	関 口	山 口
	小 栗	小 栗	入 江	入 江	斎 藤	小 川	小 栗	小 栗	小 栗
	関 口	関 口	関 口		関 口		関 口		関 口
	井 口	谷 津	井 口	前)谷津 後)井口	井 口	井 口	多 田	井 口	小 池
入 江	入 江	入 江	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 竹	大 竹
	渡 辺	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和	大 和
	大 和	渡 辺	渡 辺	渡 辺	渡 辺	渡 辺	渡 辺	渡 辺	渡 辺
		大 和		桜 井	桜 井	桜 井	桜 井	桜 井	桜 井
前期 小栗 後期 小川 代講 渡辺	小 栗	小 栗	桜 井 小 栗	小 栗	桜 井	桜 井 小 栗	桜 井	桜 井 小 栗	桜 井
小 栗									
	大 和		大 和	大 和	大 和	大 和	小 川	小 川	小 川
関 口									
	谷 津		谷 津				井 口		須 藤
									宮 部
		井 口		井 口		多 田		多 田	
	多 田	多 田	多田(代 渡辺)	多 田	多 田	多 田	多 田	多 田	多 田
谷 津									
大和・谷津・井口									
				関 口					
								大 和	大 和

地形学（4）　気候学（4）　海洋学及陸水学（4）　地質学及土壌学（4）
地球物理学（4）　天文学（4）　地理統計学（4）　民族学（4）　史学概論（4）
仏教史（4）　国史概説（4）　東洋史概説（4）　西洋史概説（4）

4.　学科目履習，卒業の方法

旧制度では学年毎に履習科目が決めてあり，それをおとすと進級あるいは卒業できない制度であったが，新制大学になってからは単位制となった。その履習方法は，地理学専攻の学生で卒業の資格を得ようとする者は4ケ年以上在学し，一般教養科目の各系列につき3科目12単位以上合計31単位以上（宗教学4単位，憲法2単位は必修とする）を履習しなければならない。外国語は第1外国語10単位，第2外国語1ケ国語4単位合計14単位を履習しなければならない。

専門科目は地理学専攻のものは地理で開講している必修科目全部並びに選択科目合せて72単位以上（このうちに卒業論文8単位を必修）履習しなければならない。体育は講義2単位以上実技2単位以上を履習しなければならない。

教員の資格を得ようとするものは別に教職課程を履修しなければならない。また実習校へ行って，教育実習をしなければならない。

かくして卒業資格を得たものには文学士の称号が与えられることになった。

5.　教員組織

昭和24年新制大学地理歴史学科地理学専攻発足当時の教員は次記の通りであった。

専任教授井上修次　専任助教授井関弘太郎

兼任講師入江敏夫，谷津栄寿，多田文男，小栗宏，河田喜代助，関口武，辻本芳郎，（野口保市郎，松尾俊郎）

昭和25年入江敏夫，谷津栄寿の2氏が専任助教授になって教員組織が充実した。

昭和26年井関助教授が名古屋大学の懇望によってその招聘に応じて駒沢大学を退職し，これに代って大和英成氏が講師として来任された。

井上修次教授は此頃，旧制専門部を卒えて新制学部に再入学して来た原田節二君を指導して三富新田の研究に没頭していた頃であり，谷津栄寿助教授は文理科大学で吉村信吉，大塚弥之助両博士に就いて地形営力の実験的，実地踏査的研究法を身につけ，この頃は河川礫の移動の研究に没頭していた頃で学生の先頭にたってフィールドワークを行っていたし，学生の世話にも熱心だったので信望が厚く教室の中心教員であった。入江敏夫助教授は資源科学研究所にも研究机をもち，人文地理学一般について学生に懇篤な指導を行っていた。

昭和27年9月17日ベヨネース列岩の南東に海底火山の噴出があり，明神礁と名付けられた。東京高等師範学校教授であり駒沢大学で地質学を担任して居た河田喜代助講師は同噴火調査のため田山利三郎氏と共に水路部第5海洋丸に乗船9月23日東京港を出航，明神礁に向ったが，そのまま，消息を絶った。遭難調査委員会の調査によって海洋丸は9月24日午前10時―午後1時の間に突発的な事故に遭って沈没したという結論が下され，河田講師は船と共に遭難したものと推定された。河田講師は学生の信望が厚く，学生から一入惜しまれた。

昭和29年井上修次教授は北海道大学教授として赴任されて退職し，これから昭和35年大和英成氏が教授となるまで専任の教授がなく筆者が兼任講師ながら学科主任の代役を勤め教授会にも出席したことがある。されば昭和37年行われた八十周年記念祝典では永年勤続者として表彰されている。教室の運営は谷津・入江・大和の３氏によってまかなわれた。

その後，谷津助教授は中央大学の専任助教授に移られてその後任には同じく地形営力論を研究する井口正男氏が助教授として来任された。

昭和32年４月現在の専任助教授は入江敏夫，大和英成，井口正男の３氏，兼任講師として小栗宏，今朝洞重美，桜井正信，関口武，多田文男，谷津栄寿，山鹿誠二（現東京学芸大教授），渡辺一夫（現法政大教授），小川徹と計12氏の名が見える。

井口助教授はこの頃牧ノ原礫層等の実地観察に従事され，学内では実験設備の充実に努力され他日営力論の実験を行なう準備をして居た。

大和助教授は昭和33年東大大学院博士課程をおえて駒沢大学助教授となり，昭和34年は「低湿地の農業地理学的研究」という学位請求論文を東大に提出して理学博士の学位を得られ，35年には駒沢大学の教授となって教室を主宰することとなった。指導生には農業地理学で卒業論文を書くものが多くなり，大和教授の教育方針が貫かれるようになった。

昭和17年駒沢大学地理歴史学科をおえた桜井正信氏は旧制学部人文学科を了えてから暫らく家業についていたが，終戦後，卒業生有志並びに同志を集めて世田谷区誌研究会を組織し，雑誌「世田谷」を発刊する等，野にあって郷土地理学並びに歴史地理学の研究に従事していたが，大和氏を助けて昭和27年以来駒沢大学講師となり，郷土地理学並びに歴史地理学の講義を担当することとなった。

昭和18年駒沢大学地理歴史学科を卒業した今朝洞重美氏は法政大学新制学部，同大学院修士課程で地理学を深めたが，成城学園で子弟の教育に当ると共に昭和26年頃から駒沢大学講師となり，地理学科，短大並びに二部で主として地学の授業に当たった。

大和教授は東大卒業の経済地理専攻の斎藤光格氏（現神戸大教授），海洋学専攻の須藤英雄氏(現水産庁技官）等を迎えて講師としたが短期で終った。

昭和39年井口助教授が立正大学に移って，その後任として東大大学院を了えた小池一之氏を迎えることとなった。小池氏は阿武隈山地の地形学的研究によって昭和43年理学博士の学位を得た新進の学徒であった。この時同じく東大を卒えてアメリカに永く留学した山口岳志助教授（現東大助教授）が来任し経済地理学・外国地誌を担当した。

また東大修士課程を了えた上坂修夫氏も経済学部の経済地理学担当の教員として就任，地理学科の集落地理学，人口地理学等の講義を兼担することとなった。

6. 専門部地理歴史科卒業生の新制大学への再入学

駒沢大学専門部の卒業生で駒沢大学新制学部地理歴史学科に進学した原田節二氏のような人もあったが，法政大学新制学部の地理学科は夜学であったため，駒沢大学専門部を卒業して教職についている好学の士で現職のまま法政大学地理学科に進学したものが多かった。今朝洞重美，浅野勝，

栗山稔，長野覚，石川雄三の諸氏である。中島義一氏は国学院学部史学科に進学してこれを卒業した。

7. 新制大学卒業生の他大学大学院への進学

駒沢大学には昭和41年まで地理学専攻の大学院がなかったため，他大学大学院に進む者も多かった。大和英成氏が東大大学院に進んだことは前述したが，都立大学大学院１人，法政大学大学院には今朝洞重美等７氏が進学して修士となった。

駒沢大学に地理学専攻の大学院ができて後も大学院間の地理学交流の一翼として他大学大学院に進んだ者もある。都立大学大学院へ１人，法政大学大学院へ３人，明治大学大学院に２人進学した。一方，他大学を出て，駒沢大学大学院に進学したものとして法政大学から山口源吾氏等３人あり，明治大学から川島洋雄等の２氏あり，早稲田大学から加藤徹等３氏，更に千葉大学，国学院大，立正大，流通経済大からも１人ずつ入学している。

Ⅳ 新制大学地理学科時代後期―大学院併置時代―（昭和41～52年）

1. 大学院地理学専攻設置

駒沢大学でも地理学専攻の大学院課程設置の議が起り，昭和40年には藤田学監が中心となって設置準備にかかり，教員の詮衝は大和教授と筆者に一任，施設の整備・文献の蒐集には大和英成，小池一之の両氏が当り40年11月には文部省に設置認可を求めることになった。担当教員候補としては大和教授・筆者の外に古地図学の泰斗，法政大学名誉教授秋岡武次郎氏，お茶の水大学名誉教授・日本大学教授飯本信之氏，横浜国立大学地理学科元主任教授松尾俊郎氏，国会図書館の酉水孜郎氏，農林省農業技術研究所の上野福男氏の来任を願う事にして設置認可を申請して，41年３月28日文部省の認可を得て，41年４月１日から開講する運びとなった。このようにして多数の優秀な教員を集めることができたのは，日本の私立大学としては始めてのことであった。

開講科目は学生が自由に勉強できるよう大わくのものを設定した。

駒沢大学大学院地理学専攻開講科目と単位

学科目	学習方法	単位	学科目	学習方法	単位
修士課程					
自然地理学特論	講義	4	地理学特論	講義	4
〃	演習	4	〃	演習	4
人文地理学特論Ⅰ	講義	4	地図学特論	講義	4
〃 Ⅰ	演習	4	〃	演習	4
人文地理学特論Ⅱ	講義	4	地誌学特論	講義	4
Ⅱ	演習	4	〃	演習	4
博士課程					
地誌学特殊研究	講義	4	自然地理学特殊研究	講義	4

第4表　新制駒沢大学文学部地理歴史学科地理教員名
（昭和24年～昭和40年）

昭和24年	昭和25年	昭和26年	昭和27年	昭和28年	昭和29年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年	昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年	昭和38年	昭和39年	昭和40年
多田　文男					多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田	多田
河田喜代助	河田	河田	逝去													
入江　敏夫	入江	入江	入江	入江	入江	入江	入江	入江	入江	入江						
小栗　宏	小栗	小栗	小栗	小栗			小栗	小栗	小栗	小栗	小栗	小栗	小栗	小栗	小栗	小栗
関口　武	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口	関口
谷津　栄寿	谷津	谷津	谷津	谷津	谷津	谷津	谷津	谷津	谷津							
山鹿　誠次	山鹿	山鹿	山鹿	山鹿												
井上　修次	井上	井上	井上	井上												
井関弘太郎	井関															
小堀　巖																
松尾　俊郎																
野口保市郎																
赤峯　倫介																
	大和英成	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和
		今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞						今朝洞	今朝洞	今朝洞
		鈴木健四郎	鈴木													
			桜井正信	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井	桜井
			小川徹	小川	小川	小川	小川					小川徹	小川	小川	小川	
					井口正男	井口	井口	井口	井口	井口	井口	井口	井口	井口		
					渡辺一夫	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺	渡辺
											斎藤光格					
													高木久	高木	高木	高木
													大竹	大竹	大竹｜	
															｜武久	武久
																山口岳志
															小池一之	小池
															須藤英雄	須藤
																上坂修夫
															大森五郎	大森
															宮部直巳	宮部
										副手	稲葉良彦		菊地正義	伊藤喜代子	長沼信夫	長沼

〃	演習	4	〃	演習	4
人文地理学特殊研究Ⅰ	講義	4	人文地理学特殊研究Ⅱ	講義	4
〃	演習	4	〃 Ⅱ	演習	4

2. 大学院教員・学生

大学院地理学専攻の昭和52年度の現・旧教員は次の如くである。

a 博士課程 現専任 多田文男，酉水孜郎，上野福男，小川徹，桜井正信，小池一之
現兼任 村田貞蔵，木内信蔵
旧専任 飯本信之，松尾俊郎，宮部直巳，大和英成
旧兼任 秋岡武次郎

b 修士課程 現専任 多田文男，酉水孜郎，上野福男，小川徹，桜井正信，小池一之，大森五郎
現兼任 木内信蔵，貝塚爽平
旧専任 飯本信之，松尾俊郎，宮部直巳，大和英成
旧兼任 秋岡武次郎，中野尊正

地理学専攻の入学定員は修士課程毎年５人，博士課程年２人である。

修士課程では２年以上在学し，30単位以上を履習し且修士論文を提出し合格した学生を卒業生とし，修士の学位が与えられる。博士課程では３ケ年以上在学し，20単位以上を履習し，卒業論文と最終試験に合格したものを卒業生とし，博士の学位を与えることになっている。博士課程に３ケ年以上在学し，20単位以上を履習したが卒業論文を提出せず退学するものを満期退学と仮称している。

地理学専攻では創立以来昭和51年度までに64人の修士と，12名の満期退学者を出している。満期退学者の１人山口源吾氏は退学後３年以内の昭和48年に「中央日本の山岳地域における高距限界集落の人文地理学的研究」という卒業論文を提出して課程博士となった。山口氏は明治41年長野県に生れ，岡谷の県立高校の教諭となったが向学心強く，内地留学生として東大で地理学を深め，次いで法政大学大学院修士課程を終えて，更に本学の博士課程に入り高距集落の研究を続けた人である。卒業後，中央学院大学教授となり，休暇にはスイス，フィンランドを旅して山地集落の研究を深めている。昭和49年「高距限界集落」という論文集を刊行している。

3. 学部地理歴史学科の地理学科・歴史学科の正式分離

地理歴史学科では昭和19年から地理学専攻と歴史学専攻とに分けて学生を入学せしめ，学科目，履習方法，運営法も別々に独立した学科のようになって来たことは前述したが，昭和41年３月に大学院地理学専攻，日本史学専攻が別々に認可され，教員組織，施設ともに充実して来たので，大学はなお一層教育効果をあがらしめるため，昭和41年５月，従来の地理歴史学科を廃止して，地理学科と歴史学科を増設し，入学定員は地理歴史学科50人であったのをそれぞれ40人計80人に定員増することを決め，昭和41年12月26日文部省の認可を得た。かくて永い伝統をもった地理歴史学科は発展的に解消し，地理学科，歴史学科の２学科に分離したのである。昭和48年度からは地理学科入学

定員は100人と増したが，実際には各学年180人，全体で700人を越す大世帯となった。

4. 論文博士の誕生

文学博士の学位は本学の大学院に席を置かなくとも学位請求論文を提出して審査に合格し，しかも学力が大学院博士課程を終えたものと同等以上のものには授与できる。論文博士と通称する。

本学においては，松尾俊郎教授が「関東山地東辺地帯における集落の人文地理学的研究」という学位請求論文を提出して，昭和44年９月文学博士の学位を獲得した。松尾教授は明治30年佐賀県鹿島に生れ，東大で地理学を専攻された後，文部省図書監修官，東京農工大学教授，横浜国立大学教授を経て，昭和41年本学に大学院地理学専攻を設置するに当り，招聘され，昭和50年３月まで大学院学生の育成に当られた人で，ブリュンヌの「人文地理学」の訳や「日本の地名―歴史の中の風土」等の著作もある本邦地理学会の耆宿である。

昭和50年２月にはロンドン大学教授で，「東亜及びアフリカ研究所長であるチャールス・アルフレッド・フィッシャー (Charles Alfred Fisher) 氏もその著「東南アジアの地理」を主論文として文学博士の学位を獲られた。同氏は1916年英国アッテンバラに生れ，ケンブリッジ大学で学士，修士となり，更にオックスフォード大学でも修士の学位を得た後，レスター大学を経てロンドン大学教授となった人。戦争中は東南アジアの踏査中現地で応召し，日本軍の捕虜にもなった人であり，知日家である。東南アジアの研究では世界でも屈指の学者である。イギリスに留学した日本人地理学者の多くが世話になり指導を受けている地理学者である。

5. 教員の移動

昭和41年４月，大学院地理学専攻を学部に付置するために多田，飯本，松尾，酉水，上野の５人の専任教授が新任され，更に秋岡武次郎氏が兼任講師として大学院の地図学の講義を２ケ年だけ担当したので，地理学科の教員数が多過ぎるようになったので，これまで永きは10数年に渉って講義を担当して来た，小栗，須藤，関口，渡辺一等の兼任講師には41年度から退任して戴いた。しかし土壌学担当の松井健講師，地図学担当の武久義彦講師など特別の教科の教員にはそのまま残留して貰った。

大学院の講義を充実するために，昭和43年からは地図学の中野尊正氏（現都立大学教授），変動地形の貝塚爽平氏（同上），更に昭和48年から地域論の木内信蔵東大名誉教授，昭和50年度から扇状地地形研究の村田貞蔵都立大名誉教授を招聘した。一方学部で計量地理学を振興するために奥野隆史氏，昭和50年から気候学を充実するために中村和郎氏，地図学，測量学，空中写真判読法の知識を涵養するために鳥居，細井，星埜の諸氏に交互に兼任講師として来任して貰っている。

一方退職あるいは逝去された教授もあった。飯本信之，松尾俊郎両教授は大学院設置に際して来任した人であるが，飯本教授は48年３月，松尾教授は50年３月定年退職された。昭和48年５月には大和英成教授，同年８月には宮部直巳教授の逝去に会った。

大和教授は大正８年東京に生れ，昭和11年本学専門部地理歴史学科に入学，昭和15年３月同科を卒業，その後東京外語大学でドイツ語を，法政大学旧制学部で地理学を修めた後，東大地理学科大学院に進み，昭和34年理学博士の学位を得た。昭和25年から地理学科の教員となり，講師，助教授

と進み，昭和35年から教授となって学科主任の役につき，学科の運営，指導に当った。昭和48年5月30日心臓弁膜症で現職のまま逝去された。享年54歳。駒沢大学地理学科に学生として，先輩として，教員としてある事38年，学科の発展のために多大の貢献をされた人であった。著書として「農業地域の変貌過程」がある。

宮部直巳教授は自然科学教室主任であり，一般教養の物理学を担当していたが，地理学科では地球物理学の講義を担当していた。教授は昭和2年東大理学部物理学科を卒業，東大地震研究所に入所して三角測量・水準測量の結果から日本の受けた地殻運動を研究された後，名古屋大学に移って物理学科主任を勤めた。後国土地理院に移り，昭和39年本学に赴任され，この頃は地盤沈下の研究に没頭していた。昭和48年8月19日十二指腸始頭部穿孔のため逝去された。享年71歳，300を越す研究論文があった。

昭和49年には山口助教授が北海道大学に転職された。氏はアメリカ留学後昭和40年本学に赴任したが，転任迄の間にも二ケ年間カナダ・ヴィクトリア大学の客員教授としてカナダに在外研究したこともあった。

退職，転任，逝去した教員の代りとして来任した教員が数多くあった。

今朝洞重美教授は昭和26年から本学教員となっていたが昭和49年から地理学科専任教授となった。自然地理学担当の教員としては昭和44年から長沼信夫氏，昭和47年から早船元氏，昭和52年からは高木正博氏が専任教員になった。3氏とも本学出身者であり，地理学科の助手として学生が兄事した人々である。

人文地理学担当の教員としては昭和48年茨口善美氏が来任し，講師・助教授を経て昭和52年には教授となった。広島大学を卒業後，同大学大学院で研究を続けた後，永くシカゴ大学に留学し，バングラデシュの踏査に没頭していた人である。昭和48年，小川徹教授が赴任して来た。教授は昭和27年から40年まで兼任講師として本学で人文地理学を担任されていた。自然科学教室からは昭和40年以来大森五郎教授，昭和48年度以来木沢綏教授，中島義一助教授の応援を得ている。一時は経済地理学の青野寿彦氏，都市地理学の林育男氏，化学の安部喜也氏（現公害研究所技官），地図学の武久義彦氏（現奈良大教授）を兼任講師としてお願いした。

かくて昭和52年4月には15名の専任教員（兼担も含む）7名の兼任教員を擁する充実した地理学科となった。

小池教授の在外研究中は東大の大森博雄，小川肇，上杉陽の3氏に代講を依頼した。

6. 地理学科と自然科学教室

一般教育が重視されるに従って，従来は地理学科の近隣にあって一般教養の自然科学の授業を受けもっていた自然科学の教員が集まって昭和46年度から自然科学教室をつくるようになった。しかし自然科学教室所属の教員でも地理学科の授業を兼担される教員も多く，施設や備品の有無相通じ，利用し合うものが少なくない。

昭和52年度文学部自然科学教室教員は次表の通りである。

担　当　教　科

			一般教養	地理学科
教	授	大森五郎	自然科学概論	地質学
〃		木沢綏	自然科学概論，物理学	地球物理学
〃		丹羽小弥太	生物学	
〃		三野英彦	自然科学概論	
助教	授	中島義一	地理学	日本地誌Ⅲ
非常勤講師		宇井芳雄	物理学	
〃		高木久	地学	地理教授法
〃		高橋磐	数学	
〃		中島寿雄	自然人類学	
〃		宮寺功	数学	
〃		小野幹雄	生物学	

7. 学部卒業論文と修士論文

地理学科３年の年度末に学生は卒業論文の題目と希望指導教員とを決めて学科主任に届ける事になっている。卒業論文題目が山村に関する学生は上野教授，地形に関する学生は小池教授というように，先生の専攻を考えて指導教員を学生自ら決定する。希望指導教員がない場合は主任が決定する。学生は４年生となると決めた指導教員の地理学演習の時間に出席して，先生から卒業論文作成についての指導を受け，12月10日に卒業論文を提出することになっている。卒業論文の成績は８単位，それに地理学演習の成績４単位を加えると卒業論文は地理学科では最も重要な必修課目となっていることになる。

昭和39年度から51年度にいたる13ケ年の卒業論文題目は昭和52年３月発行された駒沢地理別冊に収められている。

この別冊によると，この13年間に提出された論文総数1,644，そのうち人文地理に関するもの1439，自然地理に関するもの205で，圧倒的に人文地理に関するものが多い。論文題目を都道府県別に分けて見ると北海道に関するものが114で最も多く，東京の110がこれにつぎ，次いで関東地方の各県に関するものが多い。中部地方の静岡，新潟，長野に関するものが59を越していて多く，飛んで九州の長崎県に関するものが多く，60を越している。著しく少いのが近畿地方の７府県で少い方の１番から７番にあり，京都奈良は極少でそれぞれ６論文を数えるのみである。北海道に多いのは面積が広いのと，岩見沢教養部のあるため，関東に多いのは取材が近くて調査に行くのが容易であるためであろう。近畿地方に関するものが少いのは関西に大学が多いため，ここから駒沢大学に入学する者が少いためであろう。筆者の指導生には沖積層に関する論文を書いたものが多かったが，その成果は筆者が学界で自慢して紹介するような立派なものもある。

修士論文の昭和42年から51年度にいたる論文提出数は77，自然に関するもの31，人文に関するもの46，これを学部の卒業論文の自然人文比と比べると著しく自然に関するものが多い。修士論文が関係する地域を見ると学部卒業論文に比べて数府県にわたるような広域のものが多く，修士課程に

入学して知識が拡大した事がうかがえる。修士論文の成果は近来著しく向上し，日本地理学会等，日本の代表地理機関で発表されさものも多くなった。筆者の指導下に行った北海道に永久凍土層のあるという研究は，教師である筆者に観測器に関する自信がないために学界での発表をためらっているが，これは前人未踏の仕事である。

博士課程を修めて直ぐ提出する博士論文が，未だに提出されていないことは遺憾である。

8. 応用地理研究所設置

昭和48年４月駒沢大学応用地理研究所が新設された。応用地理学とは如何なる分野であろうか，一方に基礎理論と，それに基づく実証部分である一般地理学があり，他方に地理学以外の学問諸分野や各種の公共機関が，地理的問題について解決を迫られている問題を抱えている場合，その両者の橋渡しの役目をはたすのが応用地理学である。駒沢大学応用地理研究所では差し当り，次の部門を設けた。１）土地・水・大気の保全に関する部門，２）国土の開発計画部門，３）都市化・工業化に関する部門，４）農業経営・農村振興の部門，５）鉱業資源部門，６）環境の保全・観光事業促進に関する部門

地理学科・自然科学教室の全教員が各部門を分担研究している。初代所長は筆者がつとめ，２代目所長は酉水教授が当っている。

先ず行なった研究は国土庁土地局の土地分類図（10万分１）の東京図の作製であり，この図は昭和51年に刊行された。

9. 岩見沢教養部で地理学科の授業開始

昭和39年４月から北海道岩見沢の教養部が開学し，ここでも地理学の科目が開講された。ここでは１年２年の学生が教育せられる。設立当時は地理歴史学科で合せて学生数20名であったが41年地理学科・歴史学科が分離してからは地理学科の学生は30―40人位に増した。教員としては北大の井上修次教授が兼任講師として40年から49年まで，１ケ月に１回集中講義をしていた。39年から藤島範孝助教授が専任教員として主として人文系統の地理学を，昭和45年から47年３月迄は阿由葉（現早船）助手兼講師（出向）が自然地理学を，昭和47年４月から現在まで守屋以智雄助教授が自然地理学を講じている。地学は昭和40年から47年10月までは，川添熙氏が専任講師として担任し，同氏が現職のままの逝去後は池上茂雄氏が担当している。昭和52年度は柏村一郎氏が非常勤講師として地理学の講義を助けている。

野外巡検としては，毎年日帰りのもの月１回，夏に１―２週間程度のものが１回行われる。今までに夏期に知床半島の縦断４回，横断５回，摩周湖，忠類，宗谷，野付，渡島福島，斜里の大巡検が行われた。

10. 海外研修

駒沢大学では海外教育視察団を欧米に派遣し，海外諸国の教育状況を視察しているが，昭和42年には大和英成教授が夏期休暇を利用してアメリカ・ヨーロッパの教育状況の視察を行なった。

大学はまた若い教員を選んで１年の長期に渉る外国留学をさせ，本学の重要な教育指導者を育成している。昭和50年度には小池一之教授がイギリス・ノッチンガム大学に留学して地形学の研究を

行ない，昭和51年度には上坂修夫教授がイギリス・ロンドン大学に留学して，経済地理学を修めた。

地理学科・自然科学教室の教員で外国で開かれる学会に出席して研修した人も多くなった。昭和40年には宮部教授がソビエト，モスクワで行われた地球物理会議に，昭和43年には山口岳志助教授がハーバード大学におけるアメリカ地理学会年次大会に，同年筆者と上野・上坂3教授がインド・ニューデリーで開催の国際地理学連合総会に，45年には大森教授がスペイン・マドリードで開かれた国際鉱業会議に，46年には上野教授がオーストラリア・キャンベラで開かれた太平洋学術会議に，47年には小池助教授がカナダ・モントリオールで開催の地理学連合総会に，また51年にはモスクワで開かれた地理学連合総会に出席した。

また地理学科の教員には海外の調査研究に従事する者も出て来た。昭和45年には上野教授が東南アジア調査団の一員として，インドネシアの農業地理及び地域開発の研究に従い，茨口教授は屢々バングラデシュに出張してその地理研究に没頭している。

大学院地理学専攻の学生であった阿由葉（現早船）元君は同じクラスの若林宏宗（団長）・吾妻佑一君とアイスランド調査団を組織し，昭和43年には現地に渡り，氷河・火山・人文の研究に従事した。

この外，海外に出張して学術視察を行った人は近年頓にふえ，地理学科・自然科学教室の教員で外地を踏まないものは数少くなった。

大学院学生，学部学生でも海外留学，海外視察に赴くものが多くなった。昭和52年度には博士課程の加藤徹君がオランダ，エンスケーデの航空写真読図研究所に，同矢延洋泰君がイタリアの大学に6ケ月間留学に赴いた。

11.　学園紛争と駒沢地理学会解散

世界を渦に巻き込んだ学生運動は駒沢大学でも昭和40年末からそのきざしがあり，昭和43年3月の入学試験に際して，アジビラを配布した事件があり，11名の関係学生が処分された。この処分撤回等を求めて学生が4月25日から1号館2号館にバリケードを築いて占拠し，40日間紛争が始まった。

一方では，1号館・2号館の封鎖グループとは別に正門内噴水脇で数人の学生が処分白紙徹回を求めて5月26日から30日までハンガーストライキを行なった。

6月5日にはバリケード封鎖を行なっていたグループも大学の処分徹回案をのんで封鎖を解いた。

昭和46年7月には野尻寮において6名のグループが西洋史研究のゼミを行なっていた学生に傷害を与えた。この6名はその傷害の理由により，10月退学処分を受けた。

これらの紛争により，授業は屢々妨害を受け中断した。卒業生・在学生が教員を顧問として作っていた駒沢地理学会は，学園紛争を行う人にとっては無意義なものと見なされて解散された。学会の出していた年刊誌「駒沢地理」は3号で休刊した。この雑誌の4号から教室が代って刊行している。

12.　測量士補資格無試験検定

法令に定めてあるところによれば，大学の地理学科卒業生は測量士補の資格が無試験で与えられることになっている。ところが卒業生の中には地図学・測量学の単位もとらずに測量士補の資格を得るものもあり，測量関係会社筋から資格試験を行う可しという提案がその筋にでているという。駒沢大学では自主的に実力をつけるために地図学概説，空中写真判読法および測量学の科目を増すと共に，次のような推薦方法をとることにした。

「地理学科の学生で，地図学概説，空中写真判読法および測量学，自然地理学実習，地理学演習を習得し，さらに地形学，地質学，地球物理学，応用地理学のうち２科目を修得した者で，測量士補としての資格を得んと希望する場合は，卒業後，大学は国土地理院長に測量士補の資格が下附されるよう推薦する。」

13. 課外ゼミ活動

地理学科の学生は課外活動としてゼミナールと称する研究会をつくり，教員を顧問として同志相集まり，放課後に集会をもって切瑳琢磨し，日曜日には屢々野外巡検を行ない，休暇には特定地方を選んで数日間に亘る調査研究を行なっている。

昭和35—40年頃は人文地理ゼミ（顧問大和教授現在休止中），自然地理ゼミ（顧問井口助教授後小池教授）の２つのみであったが，その後増して集落地理ゼミ（顧問上坂教授），地質ゼミ（顧問大森教授），山村ゼミ（顧問上野教授），歴史地理ゼミ（顧問桜井教授現在休止中）地誌ゼミ（顧問山口岳志助教授，現在休止中）等が増した。これらは駒沢地理学会解散後は唯一の集会となっている。

V　駒沢大学地理学科関係出版物

1. 駒沢地歴学会誌　年刊，１—３号（昭和13—15年刊）

駒沢地歴学会は地理歴史科の学生を正会員，卒業生を特別会員，教員を顧問として，地理および歴史を研究し，併せて顧問，会員相互の連絡紙を発行することを目的とした。記事は研究発表巡検旅行記並に会の彙報を中心としていた。綿貫勇彦教授の「歴史地理の方法」赤峯倫介氏の「日本の環境論の成立」等所謂駒沢学派の地理学方法論を世に問うたものもあり，渡辺光氏の「平野の地形」保柳睦美氏の「都市と気候」筆者の「ファボードアルム」等特別講演を記事にしたものも寄稿されている。歴史方面では大久保幸次，佐藤堅司，小林元の諸氏が筆をふるっている。この会誌は戦争が激しくなったため３号で終りとなった。

2. 駒沢大学学報　第１輯　昭和16年

駒沢大学全体の学報で，仏教関係の論文が多い。地理学関係論文としては脇水鉄五郎教授の「わが国土の再検討」がのせてある。戦争が激しくなって，この学報は休刊し，昭和26年復刊したが，地理の論文は掲載されていない。

3. 駒沢大学研究紀要

駒沢大学学報が廃刊になって後，昭和30年駒沢大学研究紀要が年刊として発行された。昭和31年

刊の第14号に大和英成教授の「常習水害地における農業経営の動向」と題する論文が掲載された。以後大和教授の農業地理に関する論文が連載されている。昭和34年の17号には桜井正信教授の「鎌倉期仏教の教線拡大に関する問題」も載せられた。

4. 文学部研究紀要

駒沢大学研究紀要は昭和36年から各学部別，研究紀要に発展解消した。文学部紀要の初期には大和教授が各平野の農業地理に関する研究を連載している。遺著「農業地域の変貌」はこれらの論文を蒐めたものである。昭和42年頃からは地理学科の教員が順番で研究を発表することになった。

5. 駒沢地理 1—3号（昭和33—40年）

駒沢地理学会発行

昭和19年度から地理歴史学科では入学生を地理専攻，歴史専攻として分けてとるようになり，両専攻の学生は履修科目も卒業論文も別々となったため，別々の行動をとるようになった。それでも昭和32年までは駒沢地理歴史学科同窓会として会報を刊行しているが，その後，両専攻の学生は別々に駒沢地理学会，駒沢史学会を作り，昭和33年には駒沢地理学会編，「駒沢地理」1号が出版された。昭和40年12月までに2号・3号と3冊を出している。学園紛争が激しくなって駒沢地理学会が解散して了い「駒沢地理」も廃刊となった。

6. 駒沢地理 4号以後（昭和43年〜　　）

駒沢大学地理学研究室発行

駒沢地理学会が解散になって後，地理学研究室が発行者となって，年刊「駒沢地理」が続刊されるようになった。これには教員の研究発表が主としてあり，時に大学院学生のうち優秀な研究が掲載されている。

7. デルタ 1—4号（昭和40〜43年）

駒沢地理学会発行

地理学科では巡検毎に報告書をまとめていたが，昭和40年以後43年まで巡検報告書を主として載せ，会の彙報をも載せる「デルタ」という会誌を年刊として出すようになった。これも学園紛争にまき込まれて廃刊となった。

8. 地理学研究ノート 年刊　（昭和46—49年）

駒沢大学大学院地理学専攻生発行

昭和46年3月から地理学専攻生がその研究成果を載せるために年刊誌「地理学研究ノート」と題する雑誌を刊行した。

9. 大学院地理学研究 年刊　（昭和50—52年）

駒沢大学大学院地理学専攻生発行

「地理学研究ノート」と称する誌名では論文内容が軽く見られる懼れがあるので大学院地理学研究と改題した。

10. 蛇行 昭和45年1月刊　北海道教養部地理学研究室刊行

学生が中心となって研究発表を行ったもの。

11.　**出発**　駒沢地理学会　昭和42年　謄写版刷

この外に地理学科の在学生，卒業生が有志と共に謄写版刷のパンフレットを出していた。筆者の手許にあるもの1，2を紹介して見よう。

a　切峯面　昭和21年刊行

地理学専攻学生嘉山英二君が井高・中島義一君等と語らって松沢小学校の日吉弘教諭を立てて研究集会報告・巡検記録を載せたもの。

b　世田谷　昭和29年以後数冊発行

桜井正信教授が卒業生中島義一，井高宏，岩見英義君等と「世田谷区誌研究会」を組織し，多摩川周辺地域の郷土誌を中心に発表したもの。世田谷のボロ市，世田谷の代官屋敷の調査はその成果の一つであった。

第5表　駒沢大学文学部地理学科時代教職員名（大学院地理学専攻付置時代）
（昭和41年～昭和52年）

昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	昭和45年	昭和46年	昭和47年	昭和48年	昭和49年	昭和50年	昭和51年	昭和52年
教　員											
飯本　信之	飯　本	飯　本	飯　本	飯　本	飯　本	飯本 退					
松尾　俊郎	松　尾	松　尾	松　尾	松　尾	松　尾	松　尾	松　尾	松　尾	松尾 退		
多田　文男	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田	多　田
酉水　孜郎	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水	酉　水
上野　福男	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野	上　野
大和　英成	大　和	大　和	大　和	大　和	大　和	大　和	大和5.30	逝去			
宮部　直巳	宮　部	宮　部	宮　部	宮　部	宮　部	宮　部	宮部8.19	逝去			
大森　五郎	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森	大　森
桜井　正信	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井	桜　井
今朝洞重美	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞	今朝洞
小池　一之	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池	小　池
山口　岳志	山　口	山　口	山　口	山　口	山　口	山　口	山　口	山口 転			
上坂　修夫	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂	上　坂
高木　久	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木	高　木
秋岡武次郎	秋岡退										
武久　義彦											
松井　健	松　井	松　井	松　井	松　井							
			長沼信夫	長　沼	長　沼	長　沼	長　沼	長　沼	長　沼	長　沼	長　沼
							小川徹	小　川	小　川	小　川	小　川
	鳥居栄一郎	鳥　居			鳥　居	鳥　居	鳥　居				
	安部喜也	安　部	安　部	安　部	安　部	安　部	安　部	安　部	安　部		
		中野尊正	中　野	中　野	中　野	中　野	中　野	中　野	中　野		
				林　育男	林						
					青野寿彦	青　野	青　野	青　野	青　野		
					細井将右	細　井	細　井	細　井	細　井	細　井	細　井
		貝塚爽平	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚	貝　塚
						阿由葉元（早船）	早　船	早　船	早　船	早　船	早　船
							茨口善美	茨　口	茨　口	茨　口	茨　口
							木内信蔵	木　内	木　内	木　内	木　内
									村田貞蔵	村　田	村　田
									中村和郎	中　村	中　村
									奥野隆史	奥　野	奥　野
							木沢　綏	木　沢	木　沢	木　沢	木　沢
							中島義一	中　島	中　島	中　島	中　島
								星埜由尚	星　埜	星　埜	
									上杉　陽		
									小川　肇		
									大森博雄		
助　手											
長沼　信夫	長　沼	長　沼	阿由葉元	（教養部出向）（阿由葉）岡田義和	（教養部出向）（阿由葉）岡　田		高木正博	高　木	高　木	高　木	高　木
副　手	細　野	細　野	沼田博子	沼　田	早船みな子	早　船	小室美代子	新谷小夜子	新　谷	新　谷	新　谷